ライオン
小学生向け
口腔保健活動の
歩み

公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所

目次

子どもたちをむし歯から守る……3
日本初の子ども専門歯科診療所……5
「歯みがき体操ヨーイ、はじめ」……6
歌って踊る、ライオン歯磨児童劇団……7
「歯みがき大会」はじまる……8
戦時下も続く歯みがき大会……9
復興の街に笑顔を届ける……10
待ちかねた「歯みがき大会」の復活……11
時代と共に進化する「歯みがき大会」……12
歯みがきで育む自立的な健康行動……13

事業を通して社会に奉仕するライオン

１８９１(明治24)年、東京・神田で創業したライオン(株)は、創業者・小林富次郎の「事業を通して人々の幸せに奉仕する」という志を受け継ぎ、ハミガキや石鹸・洗剤、医薬品などの事業を展開すると共に、早くから社会貢献活動に精力的に取り組んできました。

とくに、国や行政に先駆けて１９１３(大正２)年から開始した口腔保健活動は、食生活の欧米化によるむし歯の増加から人々を守るため、正しい歯みがき方法の指導・普及、歯科検診活動、最先端の歯科診療所の開設など、多彩なアイデアと大胆な行動力で、幅広い分野に拡大。一企業の社会貢献活動として空前の規模へと成長しました。

本書では、１００年を超えて今日も続くライオンの口腔保健活動の中から、子どもたちを対象にした活動の歩みをご紹介します。次代を担う子どもたちの健康に貢献したいと願い続けた私たちの軌跡をご覧いただければ幸いです。

２０１８年 1月

公益財団法人ライオン歯科衛生研究所

理事長　藤重 貞慶

子どもたちをむし歯から守る

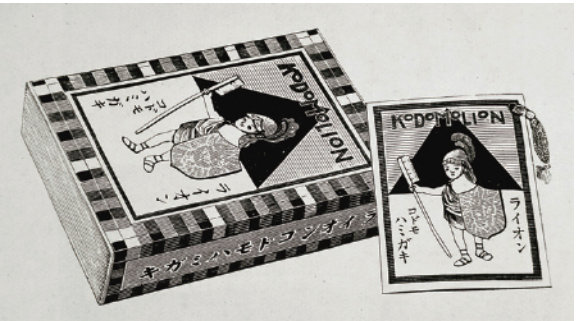
東京・神田で開催された「第1回ライオン講演会」。ライオンは明治後期からむし歯予防の啓発を行っていたが、より社会的に影響力のある活動をめざし、講演会形式を企画した。

むし歯の罹患率96％

「このままでは、むし歯で国が滅んでしまう」。食生活の欧米化により、子どもたちのむし歯罹患率が96％を超えた明治末期、ライオンは、強烈な危機感と使命感を胸に、口腔保健活動への道を歩みはじめました。

日本では古来から木製の楊枝などで歯を清掃する習慣がありましたが、従来の冷たく堅い食べ物が減り、温かく、柔らかく、甘い食べ物が多くなると楊枝ではむし歯を防ぐことができず、西洋からもたらされた歯ブラシもなかなか浸透しませんでした。ライオンは1896（明治29）年から粉歯磨き剤「獅子印ライオン歯磨」を発売し、優れた品質で事業を拡大させていきましたが、むし歯は増えるばかりです。そんな中、「口腔衛生の大切さを多くの人々にインパクトをもって伝える手段はないか」という社会奉仕への熱い想いから生まれたのが、日本初の口腔保健活動として歴史に名を残す「ライオン講演会」でした。

「ライオン講演会」は、著名人を招いて社会的に関心の高い話題について講演をしてもらい、同時に口腔衛生の講演も織り交ぜてその啓発を図るものでした。当時、一企業が



大人用だけだったハミガキを子ども向けに改良した「ライオンコドモハミガキ」。楽しみながら歯みがき習慣を付けてもらうようデザインを工夫し付録も付けて販売した。（1913年発売）

このような講演会を行う例はなかったため、音楽演奏なども取り入れた集客の期待できるプログラムを練り上げ、1913（大正2）年に東京で「第1回ライオン講演会」を開催。すると予想以上の大成功となったため、これに自信をつけ、全国各地で次々と講演会を開催します。市内の集会所などのほか、小学校、女学校などで子ども向けの講演も行い、初年度の実施回数は175回。その後20年にわたって10万回以上開催し、口腔衛生思想の普及に大きな役割を果たしました。

子どもたちの啓発は、まず教職員から

さらにライオンでは、子どもたちをむし歯から守るには教職員への指導が重要だと考え、1918（大正7）年に全国の小学校教員を対象とした「口腔衛生講習会」を東京で開催しました。その内容は、文部省学務局長や北里柴三郎など第一線の講師陣が4日間にわたって講義を行う当時の口腔衛生の最先端をいく画期的なものでした。また受講料を無料にした上、地方からも参加しやすいように東京までの旅費の半額をライオンが負担するという破格の待遇だったため、定員200名のところへ1000人以上の申し込みが殺到。講習会は、関東大震災によって中止になった1923（大正12）年まで、京都や福岡、札幌でも開催され、教職員への口腔衛生思想の普及を果たしました。

日本初の子ども専門歯科診療所

「ライオン児童歯科院」での治療のようす。現代の歯科衛生士にあたる口腔衛生婦を日本で初めて育成し活躍したことでも歴史に名を残している。

「ライオン児童歯科院」開設

1921(大正10)年になると、ライオンは、子どもたちのための歯科診療活動にも進出します。きっかけは、米国へ視察に出かけた重役の神谷市太郎が、ボストンやニューヨークの児童専門の歯科診療所に深い感銘を受けたことにありました。「日本にもこのような施設をつくりたい」という熱意から、日本初の児童専門医療機関「ライオン児童歯科院」が誕生しました。児童専門の歯科院にふさわしく、治療椅子は子ども用の専用椅子を輸入し、待合室の壁には人気の童画家・河目悌二が描いたかわいい動物の絵を飾りました。また診療時の不安や恐怖感を和らげるために、女性歯科医師がおとぎ話をしたり、歌いながら治療する方法も考案しました。

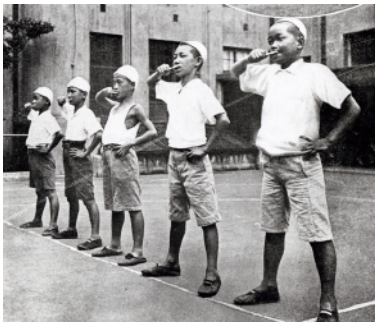
「ライオン児童歯科院」は、子どもたちや父兄の信頼を集め、開設当初、1日45名だった患者数が、1年後には約120名に増加。その後、設備をさらに拡充し、治療科、充填科、矯正科、X線科という児童歯科診療のすべてをカバーできる診療体制を整備しました。こうしたライオンの診療活動は、戦後は「ライオン・ファミリー歯科診療所」に、そして現代は「東京デンタルクリニック」へと引き継がれています。

「歯みがき体操ヨーイ、はじめ」

子どもたちに正しいみがき方を指導

子どもたちに正しい歯みがき方法を覚えてもらうには、実際に練習するのが一番。そんなアイデアから生まれたのが大正時代に始まった「歯磨教練」です。教練という名の通り、子どもたち全員が歯ブラシを持ち、号令に合わせて体操のように歯みがきの練習を行います。ライオンは、1922（大正11）年から、小学校に専門講師を派遣して「歯磨教練」の普及を支援。当時は、間違ったみがき方をしている子も多かったので、上・下に歯ブラシを動かし食べかすを取り除き、歯ぐきのマッサージもできる正しいみがき方を指導しました。

さらに1925（大正14）年からは「全国学校歯磨教練」と名称を変え、活動規模を全国へ拡大します。ライオンの専任チームが学校を訪問し、10年間に約2万校の小学校で「歯磨教練」を実施し、参加した児童総数はのべ約2600万人に達しました。小学校からの報告には「自発的に歯をみがくようになった」「歯みがきだけでなく、身辺を清潔にする習慣が身に付いた」「教練をきっかけに校内に歯みがき用の洗面所を設けた」などの声があり、口腔衛生の向上に大きな効果をあげました。



大正時代の「歯磨教練」のようす。米国で行われていた〝Toothbrush Drill〟が「ライオン講演会」で紹介され、全国に広まった。

歌って踊る、ライオン歯磨児童劇団

ユニークな活動で子どもたちの心をつかむ

ライオンは大正時代から社内に広告部を設け、画家や詩人が芸術性豊かな広告を数多く制作。子どもたちの関心を集め、口腔衛生意識の向上に役立った。

こうした「歯磨教練」と並行して、ライオンは大正から昭和の初めにかけて、子どもたちに歯みがきの大切さを理解してもらうためのユニークな企画を立て、全国各地で多彩な啓発活動を展開しました。

1924(大正13)年にはライオン歯磨児童劇団を結成し、口腔衛生をテーマにした「歯の国ものがたり」「ライオン・デンタル・レビュー」など、芸術性豊かな作品を発表。大阪市の天王寺公会堂を皮切りに、東京をはじめ全国各地で数十回の公演を行い、子どもたちにむし歯予防の大切さを自然と理解させる効果的な役割を果たしました。

また、1926(昭和元)年には関西地区で小学校児童口腔診査会を行い優良歯牙の所持者1500人を選抜表彰。この試みは関係者から評価され、その後、全国の自治体で口腔診査会が行われるようになりました。また1927(昭和2)年には小学生から口腔衛生の標語募集を始め、優秀作を記した「しおり」を小学生約61万人に配布。あの手この手のアイデアで、歯みがきの大切を訴え続けました。

「歯みがき大会」はじまる

日比谷公園音楽堂で行われた「第1回学童歯磨教練体育大会」。現在も続く「全国小学生歯みがき大会」の原点がここにある。

「学童歯磨教練体育大会」の開始

昭和に入ると、日本で最初の社会保険制度である「健康保険法」が施行（1927・昭和2年）され、国の健康保険制度を担う公法人として、各都道府県の歯科医師会と、全国組織である日本歯科医師会が誕生します。さらに、むし歯予防を指導する学校歯科医の設置を推奨する「学校歯科医令」が公布されるなど、口腔保健活動を公に行う体制が整い始めました。こうしたなか、1928（昭和3）年には日本歯科医師会が主催し、内務省、文部省が支援する「むし歯予防デー（毎年6月4日）」が始まり、徐々に社会に浸透し始めます。

ライオンは、「むし歯予防デー」を盛り上げるため、「全国学校歯磨教練」を、「むし歯予防デー」の協賛イベントに位置づけ、その規模を大幅に拡大。1932（昭和7）年に「第1回学童歯磨教練体育大会」として、東京と大阪で盛大に開催しました。東京では日比谷公園音楽堂前に約30校1万名、大阪は天王寺公園に約40校1万5000名の児童が参加。手に手に歯ブラシを持ち、号令に合わせて歯磨教練を行うようすは、華麗なマスゲームのような大迫力となりました。

戦時下も続く歯みがき大会

戦時下にも関わらず、後楽園スタヂアムに1万人の児童が参加した「第9回学童歯磨教練体育大会」。

戦争に負けない口腔衛生普及への熱意

その後、日中戦争が始まり世の中に戦時色が濃くなってきても「学童歯磨教練体育大会」は、毎年継続的に開催されました。

1937(昭和12)年の第6回は、「むし歯予防デー」の10周年にあたり、戦時下にも関わらず、ライオンと学校歯科医、学校教職員が数カ月前から入念な準備を重ね、6月5日、東京・隅田公園にて学童8000人が参加した盛大な大会を実施しました。また、この頃の「歯磨教練」は、号令だけでなく楽器によるリズムや伴奏を付けるようになり、ライオンは歯磨体操用の音楽「歯磨教練」や「ほのぼの明るく」などをレコード化して一層の普及を図りました。

また、太平洋戦争開戦の前年にあたる1940(昭和15)年は、紀元2600年とライオンの創業50周年が重なったため、記念行事として東京・後楽園スタヂアムのほか名古屋市(参加児童数4500人)、静岡市(2600人)、金沢市(1万人)、桑名市(2000人)でも「歯磨教練体育大会」を開催。しかし、その後は戦局の悪化により12年間中断されることになりました。

復興の街に笑顔を届ける

「ライオン・ヘルスカー」1号車。屋根からかわいい動物の人形が登場し、音楽に合わせて歯をみがく動作をして子どもたちを楽しませた。

動く診療所「ライオン・ヘルスカー」

長く悲惨な戦争は、日本各地に深い爪痕を残し、ライオンも本社や営業所、工場を焼失し、多くの海外拠点を失いました。しかし、連合国軍最高司令官総司令部の統制による不自由な事業環境の中で再生への努力を続け、終戦から3年後には早くも自らの使命である口腔保健活動を再開します。娯楽や文化施設の少ない時代、「生活に潤いをもたらし、文化のオアシスになるような口腔保健活動」をめざして、講演会、映画会、レコードコンサート、移動動物園、子どもサンデースクールなどを展開し、各地で大盛況となりました。

さらに、1952(昭和27)年には、戦後の口腔保健活動のシンボルとも言える「ライオン・ヘルスカー」が登場します。「ライオン練歯磨」を模したユニークな車内には展示パネルや映写機のほか、児童歯科診療に必要なすべての設備を搭載。毎日、小・中学校2校を訪問し、講演、診療、映画上映を行い、熱狂的な歓迎を受けました。「ライオン・ヘルスカー」は3号まで製作され、まだ舗装されていないでこぼこ道を走りながら日本全国を津々浦々まで、口腔衛生の知識と笑顔を届けました。

待ちかねた「歯みがき大会」の復活

「第10回学童歯磨訓練大会」

戦争の影響で中断していたライオンの「学童歯磨教練体育大会」も、１９５３(昭和28)年、ついに再開の時を迎えました。高らかなファンファーレを合図に代々木の外苑競技場に1万２０００人の児童が華々しく入場行進を行い、スタンドは約2万人の見学児童で埋め尽くされました。そして、楽団の演奏に合わせて全員が歯磨訓練を行う光景が13年振りに蘇ったのです。「レクリエーション」の部では、警視庁音楽隊による吹奏楽演奏や米国極東空軍のヘリコプターによる飛行実演が披露され、子どもたちの記憶に残る大会となりました。

その後、「学童歯磨訓練大会」は年々盛大に開催され、１９５４(昭和29)年の第11回大会は、文化放送によってラジオで生中継され、１９５６(昭和31)年の第13回大会のようすは、ＰＲ映画として初めてフルカラーのシネマスコープで撮影。迫力ある映像が学校巡回などの映画会で大いに活用されました。そして、東京オリンピックの翌年に開催された第22回大会は、東京国立競技場に児童約7万５０００人が参加する口腔保健活動史上最大規模の大会へと成長を遂げました。

現在の国立競技場の前身となる外苑競技場で開催された「第10回学童歯磨訓練大会」。ＧＨＱの意向で、軍隊用語である「教練」から「訓練」へと名称が変更された。

時代と共に進化する「歯みがき大会」

インターネットで世界へひろがる

歯みがき大会にインターネットを通して参加するタイの小学生。このほか、台湾、韓国、中国、フィリピン、ベトナム、マレーシア、インドネシアからも参加している。

その後も「学童歯磨訓練大会」は、時代に合わせて進化を重ね、１９９４（平成６）年の第51回大会からは、従来の「歯みがき体操」による集団指導から、歯みがきを含めた生活習慣の問題を解決する「個別指導型」へと転換。名称もより親しみやすい「学童歯みがき大会」になりました。さらに、２００９（平成21）年の第65回大会からは、国内外へ向けたインターネットの同時配信をスタート。学校のスクリーンの前に集まった子どもたちが、ハミガキと歯ブラシを手にしながらクイズや実習を通して歯と口の健康や生活習慣の大切さについて学ぶ大会となりました。この試みは、「歯と口の健康を楽しく学べる」と関係者から高い評価を獲得しました。

また２０１６（平成28）年の第73回大会から「全国小学生歯みがき大会」に改称し、翌74回大会からは開催方式をインターネット配信から、学習内容を収録したＤＶＤ視聴に変更しました。これにより、6月1日～10日の期間中に各学校が自由に実施時間を設定できるようになり、インターネット設備の用意も不要になったため、前年の約1.7倍となる２８９３校16万人が参加しました。

歯みがきで育む自立的な健康行動

小学生の健康的な生活習慣づくりをサポート

小学生への歯みがき指導に役立つ多彩なコンテンツを紹介しているウェブサイト「歯みがＫｉｄｓ」。

子どもたちをむし歯から守るために、１００年を超えて幅広い活動を行ってきたライオンは、現在も、社会の変化に合わせた新たな取り組みに挑戦し続けています。とくに、健康的な生活習慣を身に付ける大切な時期である小学生に対しては、親から言われなくても自立的な健康行動ができるよう、多面的な支援活動を展開しています。例えば、２０１５（平成27）年には小学生だけでなく保護者、保健指導者へ向けたウェブサイト「小学生歯みがき研究サイト　歯みがＫｉｄｓ」を開設し、児童向けのクイズ、保護者向けのお悩みＱ＆Ａなどのほか、保健指導者が活用できる多彩な教材などを紹介しています。

また、小学生を取り巻く「家庭」「学校」「放課後（地域）」の３つの環境のうち、今まで口腔保健活動があまり実践されてこなかった放課後を活用した取り組みとして、地域住民の方が小学生へ歯みがきの大切さを伝える「ＬＩＯＮ歯みがき課外授業」を行政機関と連携しながら開催しています。課外授業では「歯と口の健康知識」や効果的な「歯みがき方法」、「デンタルフロスの使い方」などのほか、放課後ならではの楽しく学べる

「LION歯みがき課外授業」での、デンタルフロス実習（右）と、世界にひとつだけのMY歯ブラシの作成（左）のようす。

実習として「世界に一つだけのMY歯ブラシの作成」なども行っています。

一方、学校現場での歯科教育実践者の育成についても、保健指導者向けの講演会を開催し、学年に合わせた歯科指導のポイントや実施要項の作成について関係者が学びあう有意義な機会を提供しています。

歯みがきを通して「生きる力」を育む

さらにライオンでは、歯みがきの習慣付けを通して、子どもたちの「生きる力」と「継続する力」を育む新たな取り組みもスタートさせています。「生きる力」とは、自らの健康課題に自分で気づき、自分で解決できる能力のことで、「全国小学生歯みがき大会」では、歯肉炎のサインを学ぶとともに、症状を回復させるためのブラッシング方法を子どもたちに伝えています。さらに、歯みがきを毎日続けることが、粘り強く「継続する力」を育み、それが自分の夢の実現に繋がることをアスリートの体験談などを通して子どもたちに紹介しています。

子どもたちの健やかな成長を願って、ライオンはこれからも、時代に合わせた幅広い口腔保健活動を推進し、明るい未来への架け橋になりたいと考えています。

ライオン 小学生向け口腔保健活動の歩み
発行所　公益財団法人 ライオン歯科衛生研究所
発行　　2018年1月